近江八幡未来づくりキャンパス2020

コロナ禍での

SDGsツーリズム

近江八幡

未来づくりキャンパス

OMIHACHIMAN FUTURE MAKING CAMPUS 2020

2020

探そう、近江八幡の魅力。
創ろう、近江八幡の未来。

近江八幡未来づくりキャンパスは、ＳＤＧｓに基づきながら近江八幡の地域の魅力を再発見し世代を超えた地域との関係性をつくります。2020 年度は「コロナ禍での SDGｓツーリズム」をテーマに、高校生が「ジブンゴト」としてまちの未来を考えました。試行錯誤しながら考えたコロナ禍での SDGs ツーリズムのプランや活動を通して発見した近江八幡市の SDGs の「タネ」をご紹介します。

もくじ

近江八幡未来づくりキャンパス 2020 について	P4-7
高校生が考えたコロナ禍での SDGs ツーリズム	P8-15
高校生が発見した近江八幡の SDGs	P16-20
プログラム分析	P21-22
Message・巻末	P23

近江八幡未来づくりキャンパス

近江八幡未来づくりキャンパス（ESD 版）

滋賀県近江八幡市では、地域を持続可能に変革していく次世代の担い手育成を目的として「近江八幡未来づくりキャンパス（ESD 版）」を実施しています。ESD（持続可能な開発のための教育）の視点を取り入れ、若者が知識の習得にとどまらず、主体的に地域の課題を解決する実践力を養う仕組みづくりを目指しています。

“滋賀県・近江八幡市”

近江八幡市は、滋賀県のほぼ中央に位置し、湖上に浮かぶ日本で唯一の有人島である沖島を有しています。西の湖は、琵琶湖で一番大きい内湖であり、ヨシの群生地である水郷地帯は琵琶湖八景の一つに数えられています。安土桃山時代には織田信長が築いた安土城の城下町としても栄えるなど、各時代を代表する歴史的遺産が点在するとともに、風情が薫る景観が受け継がれています。

滋賀県

探そう、近江八幡の魅力。
創ろう、近江八幡の未来。

近江八幡未来づくりキャンパス 2020 は、SDGs(持続可能な開発目標) に基づき、近江八幡の地域の魅力を再発見し、世代を超えた地域との関係性をつくりました。高校生が「ジブンゴト」としてまちの未来を考え、地域を楽しむためのプログラムです。

SDGs 持続可能な開発目標

持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）とは 2015 年の国連サミットで採択された 2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。「誰一人取り残さない」をスローガンに掲げ、発展途上国のみならず先進国自身が取り組むべきものとして日本でも積極的に取り組まれています。

1ヶ月間のプログラムでは、「地域と SDGs」をテーマとしたセミナー、フィールドワークやインタビューなどを経て地域の魅力・問題発見を実践的に学ぶプログラムを実施しました。プログラムは、新型コロナウイルス感染拡大のため、オンラインを基本とした実施形態となりました。近江八幡市内のみならず、滋賀県内や群馬県から 11 名の高校生が参加しました。

プログラム実施内容

※実施期間 2021 年 1 月〜3 月

近江八幡の歴史や文化を学ぶ

1 月 16 日（土）13:00-17:00
@ レンタルスペース近江八幡 / Zoom

近江八幡や地域の魅力や課題について統計的な視点や「観光・ツーリズム」の視点で学び、チームで取り組みたいテーマを決定しました。

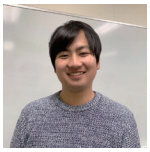
講師
田口 真太郎

2013 年、近江八幡市地域おこし協力隊を経てまちづくり会社㈱まっせでマネージャーとして設立当初から活動。伝統文化についてのリサーチから、コミュニケーションプログラムの企画運営を行っている。

地域から読み解く SDGs

1 月 23 日（土）13:00-17:00 @ Zoom

地域で SDGs に取り組むことの必要性や、身近な課題と SDGs が結びつくことを学びました。また、取材や記事作成のレクチャーも行いました。



講師
上田 隼也

一般社団法人 SDGs Impact Laboratory 代表理事。2017 年、立命館大学 Sustainable Week 実行委員会を創設。SDGs やイノベーションの知見や経験をもとに大学生・高校生向けの SDGs 教育プログラムの開発・コーディネート行っている。

実践者から学ぶローカル SDGs

2 回のセミナーの実施後には、各チームでフィールドワークや近江八幡で活動されている方にインタビューを行いました。オンラインツールを活用しながら、記事作成や SDGs ツーリズムのプラン作成に取り組みました。

発信テーマ

“コロナ禍での SDGs ツーリズム”

地域の未来を「ツーリズム・観光」を切り口に考え、持続可能な地域を実現するためのウィズコロナ・アフターコロナを見据えた新しいプランを考えます。

「若者の視点」「稼ぐ視点」「実現性の視点」の 3 つの視点をもとにプランの作成・ブラッシュアップを行いました。

若者の視点
若者が行きたくなるような工夫がされているか

稼ぐ視点
ツーリズムを 1 つの産業・ビジネスとして捉えられているか

実現性の視点
コロナ禍においても実現可能なプランか

近江八幡未来づくりミーティング ONLINE

「近江八幡未来づくりミーティング ONLINE」は、近江八幡未来づくりキャンパス 2020 の 1 ヶ月間のプログラムの成果報告会として開催しました。1 ヶ月のプログラムを受講した高校生によるプレゼンテーション、近江八幡市長と高校生とのパネルディスカッション（オンラインダイアログ）を行いました。

実施概要

日　　時｜2021 年 2 月 13 日 (土) 14:00 - 16:10
配信形式｜学校法人ヴォーリズ学園
　　ヴォーリズ平和礼拝堂より Zoom にて配信
主　　催｜近江八幡市
運　　営｜一般社団法人 SDGs Impat Laboratory

プレゼンテーション

高校生 4 チームから「コロナ禍での SDGs ツーリズム」をテーマに、作成したプランについてプレゼンテーションを行いました。

オンラインダイアログ

高校生の発表をもとに近江八幡や地域の未来についてオンライン・オフラインのハイブリッドでパネルディスカッションを行いました。

ブラッシュアップ・発信活動

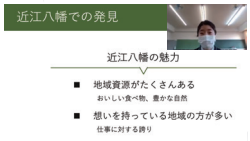
プログラム終了後も専門家とのブラッシュアップや、同世代への活動発信を行いました。

活動レポートは note にて配信！

京コネアドバイス会

京都コネクションベース（通称：京コネ）は、2019 年入学の京都大学経営管理大学院（通称：京大 MBA）の有志が集まってできた任意団体です。京大 MBA ならではの視点で、高校生のプランに対して稼ぐ視点・実現性の視点を中心にアドバイスしていただきました。

SDGs キャラバン



プログラムに参加した群馬県大間々高校の 4 名が、同じ学校で学ぶ同級生に対して、自分たちが近江八幡未来づくりキャンパスで取り組んだことや学んだことについて発表し、「コロナ禍での SDGs ツーリズム」をテーマに地域で取り組む SDGs について意見交換を行いました。

＼高校生が考えた／

近江八幡で体験できる「コロナ禍での SDGs ツーリズム」

本プログラムでは、セミナー、フィールドワーク、取材活動を通して高校生が近江八幡で体験できる「コロナ禍での SDGs ツーリズム」を考え、発信しています。ここでは、1 ヶ月間のプログラムからブラッシュアップしたプラン内容をチームごとに紹介します。

01 Wish for you ~ 生産者の想いを知ろう ~ P8-9

動画を使って生産者の思いや、普段では知ることのできない生産の裏側を知る教育的なツーリズムプラン。

02 まるっと！近江牛ツアー P10-11

近江牛を丸ごと体験できる、食べるだけでないプログラム。普段食べる食品の大切さを感じてもらう小学生の校外学習向けの食育プログラム。

03 近江八幡の SDGs に出会う旅 P12-13

近江八幡市内で活動している SDGs に取り組んでいる方々と出会い
近江八幡のリアルなつながりが生まれるツーリズム。

04 近江八幡で繋がる 松明を繋ぐ P14-15

近江八幡市内の小学生から高校生を対象とした、松明（たいまつ）で繋がり
近江八幡の魅力を発見するサイクリングツアー。

高校生が発見した近江八幡の SDGs

近江八幡市内で活動されている方を取材し SDGs やツーリズムの観点から記事を作成しました。

CONTENTS

近江八幡の食に迫る！（山形牧場・ひさご寿司） P16

みんなが同じ食卓を囲める社会を目指して（木下実験室） P17

近江八幡で繋がる、松明を繋ぐ 1（文化遺産としての松明を次世代へ贈る会） P18

近江八幡で繋がる、松明を繋ぐ 2（ラ コリーナ近江八幡 たねや） P19

伝えたい思いがここにある（橋場牧場・Cogocoro） P20

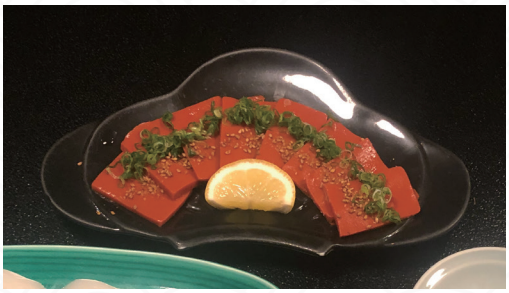
No.1 トビーズ

Wish for you ~ 生産者の思いを知ろう ~

動画を使って生産者の思いや、普段では知ることのできない生産の裏側を知る教育的なツーリズムプラン。商品やサイトに QR コードを貼り付けるなどの活用を考えています。インターネットをよく使う孫世代が祖父母世代に商品を購入し、一緒に食べることで、祖父母世代の生きがいにも繋がる画期的かつ新たな形のツーリズムです。

フードロスと消えつつある伝統食

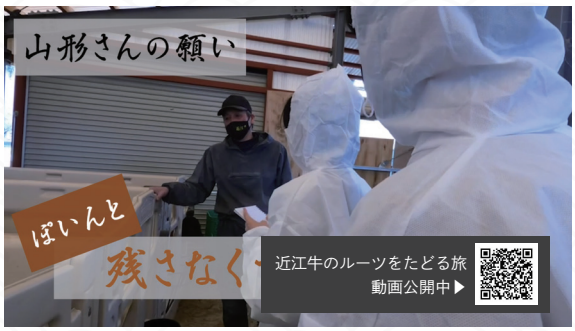
近江八幡市には、近江牛や赤こんにゃくなど、これからも残していくべき「伝統食」がたくさんあります。観光に行った際にそこでしか食べられない伝統食があるのは魅力的です。しかし、バイキングで大量に料理が提供されることなどにより食べ物が余ってしまうフードロスや、レトルト食品や海外の食文化の導入により伝統食が消えつつあるという課題があります。



▲ 赤こんにゃく（ひさご寿し）

「視聴型」SDGs オンラインツーリズム

YouTube を活用して、おもに「食」に関する動画での情報発信を行います。このツーリズムは、近江八幡市外の方に近江八幡の食のルーツに触れてもらうことを目的としており、農産漁村に滞在し農漁業体験と通して地域住民との交流を楽しむ「グリーンツーリズム」の要素を持っていると考えています。



動画はコロナ禍で人の移動が減少した中で「おうち時間」を使って学ぶことができる内容となっています。その中で現在問題となっているフードロスについても知ることができます。また、若者が触れやすい動画というツールを活用し、若者が祖父母の世代と楽むことができる情報を発信することで、より幅広い世代に近江八幡の食の魅力が伝わることを期待しています。

近江牛を楽しみながら SDGs を学ぶ

近江八幡市で体験してほしいのは、やはり近江牛です。近江牛は日本三大和牛の一つで、「肉質はきめ細かく、脂は甘くて、口の中でとろけるほど美味しい」という特長があります。そんな近江牛は今「フードロス」が大きな問題となっています。これは SDGs の 2 番「飢餓をゼロに」と 12 番「つくる責任つかう責任」が特に関わっています。食べ物を食べる時には、生産者の方の思いと、命を頂くということを考えて残さないようにしてほしいです。そして何より、食べることを楽しんでほしいです。

目標 2 飢餓をゼロに

食料及び農業生産の向上には、最大のプレーヤーである小規模農業・牧畜における生産性の向上や市場や高付加価値化などの機会のアクセスの確保が必要である。

目標 12 つくる責任 つかう責任

2030 年までに小売や消費レベルで、世界全体の 1 人あたりの食料廃棄を半減させ、生産・サプライチェーンにおける食品ロスを減少させることが掲げられている。

▲ 出典｜国連開発センター

▲近江牛を使った寿司

▲近江牛のステーキ

社会への実装を目指して

今回のプロジェクトに参加して、これまでに学習してきた SDGs をもとにアイデアを具体化することができました。

今まで関わることのなかった問題に当事者意識が生まれるキッカケとなりました。この「近江八幡未来づくりキャンパス」でないと絶対に繋がることのないような滋賀県と群馬県の高校生と協働することができ、これからこのプロジェクトを社会で実装していきたいと思います。

チーム紹介｜トビーズ

滋賀県の高校に通う 2 人と群馬県の高校生 1 人、
龍谷大学の学生メンターで構成されたコロナに負けない元気なチーム

メンバー

篠原 巧（立命館守山高校 3 年生）　鈴木 夢叶（群馬県立大間々高校 2 年生）
岡田 莉奈（近江兄弟社高校 1 年生）　井保 七香（大学生メンター / 龍谷大学 2 回生）

No.2 Ussy

まるっと！近江牛ツアー

近江牛を丸ごと体験できる、食べるだけでないツアープログラム。普段食べるものとして知られている近江牛に、『ふれあう』『使う』という体験を追加し、食品の大切さを感じてもらう食育プログラムとして小学生の校外学習として提案しました。この体験を通して、人々が食品の大切さを知ることで、食糧廃棄問題の解決を目指します。

まだ知られていない近江八幡の魅力を伝える

取材やレクチャーを通して感じた近江八幡市の魅力は、近江牛や八幡堀をはじめとする観光資源がたくさんあること、祭りなどの伝統が地域に根付いていき継承されていること、そして人がとても温かいことだと感じました。観光資源が多いことは魅力がありながらも、観光客が一定の場所に集まるなど場所によって観光客の偏りがあることが課題である感じました。人が集まっている場所以外にも、魅力のある体験施設や人との関りがたくさんあると思います。それをまず地域住民が認識し、県外の方々にも伝えていけるとさらに近江八幡が輝くと思います。

▲ 八幡堀

ツアーを通して SDGs をもっと身近に、「ジブンゴト」に

▲ 革を使ったギフトなどを販売する Cogocoro

コロナ禍ということで現地に行かない、または行けなくても近江八幡市を堪能する方法とし、私たちは新たな観光スタイルとして、オンラインで牧場見学、特産品のネット販売、離れた人にギフトを贈るの 3 つ考えました。

近江八幡市の有名な観光資源である近江牛の新しい一面の PR だけではなく、ツアーを通して SDGs をもっと身近に、そして「ジブンゴト」と感じてもらえるように、SDGs について調べたり、考えたり、行動するきっかけになることを期待しています。

食べるだけではない。今までにない近江牛が体験できるツアー

食べるだけではない近江牛の体験として「触れあう」「作る」という体験を入れました。牛に「触れる」ことのできる橋場牧場では、実際に生きている牛に触れ、命の大切さを感じ取ることができます。

そして、「作る」ことのできる Cogocoro では、革を使った商品の購入だけではなく、作ることができます。買ったり、作ったりしたものを家族や友達、あるいは遠くに居る友達などに送ったりすることで想いと一緒に近江八幡の魅力も届けることができます。

食べるだけではない近江牛の体験

牧場で牛と触れ合い
命の大切さを感じる

近江牛の牛革を使って
レザークラフト体験

▲ 橋場牧場での取材の様子

▲ 牛革を使った商品を取り扱う Cogocoro

多角的な視点で物事を考えられるように

今回の活動を通して、今まで知らなかった近江八幡について知ることができ、またプラン作りを通して多角的な視点から物事を考える力がつきました。また、私たちのチームは住んでいる場所も学年も違い、この活動を通して関わっていく中で、自分とは異なる立場の人と関わる力がついたと感じます。今後は、牧場の方に、プランについて意見をいただいたり、小学校などに実際に近江八幡や近江牛を題材とした食育を行なっているかを聞いたりし、プランの実現可能性を高めていきたいです。

▲ 橋場牧場での取材の様子

チーム紹介｜Ussy

住まいは滋賀県近江八幡市、大津市、群馬県、
かつ学年は高 1 から高 3 と多様性に富んだチーム！

メンバー

三浦 彩伽（八幡商業高校 3 年生）　坂井 楓歌（群馬県立大間々高校 2 年生）
石田 有咲（滋賀県立守山高校 1 年生）　豊田 真彩（大学生メンター / 立命館大学 2 回生）

No.3 TEMPE Girls

近江八幡の SDGs に出会う旅

近江八幡市内で活動し、SDGs に取り組んでいる方々と出会い、近江八幡とリアルなつながりが生まれるツーリズムです。市内の空き家・空き地を拠点としてセミナーを実施することで本プランが近江八幡の SDGs のプラットフォームとしての役割を担い、地域活性化につながることを目指します。

ジェンダーを通して体験した近江八幡

チームで共通の興味関心であった「ジェンダー」に焦点を当て近江八幡市についてリサーチを進めました。そこで、近江八幡市内で女性で活躍されている方の話を聞きたいと思い、市内でテンペの製造・販売をされている木下実験室・オーナーの安藤あゆみさんに取材を行いました。安藤さん自身の海外在住の経験やヴィーガンのお話を聞くことができました。

>> 記事は P.17

▲ 大豆を発酵したインドネシアの伝統料理「テンペ」

発見のタネがたくさん落ちている

取材や近江八幡市内のフィールドワークでの気付きを SDGs の視点で振り返りました。安藤さんのお話からの学びは、本来のテーマであった SDGs の 5 番「ジェンダー平等を実現しよう」だけではなく、様々な SDGs と繋がっていることがわかりました。発酵食品で栄養価の高いテンペを広めることは 3 番の「すべての人に健康と福祉を」に、まちづくりにも取り組まれているお話から 11 番の「住み続けられるまちづくりを」に、そしてテンペをアレンジているというヴィーガンのお話は 13 番の「気候変動に具体的な対策を」に繋がっていると発見することができました。

テンペは栄養価が高い

栄養価の高いテンペを広めることで多くの人が健康に

地域に根ざした活動

地域の人々に対してテンペを広めることでまちづくりにも繋がっている

植物性食品の普及

植物性代替食品としてテンペのアレンジレシピを考案している

多様な活動をする人たち × 空き家で地域活性

まち歩きをして近江八幡市内には空き家・空き地が多いことに気付き、この資源を活かして何かできないかと考えました。また、安藤さんへの取材を通して、SDGsに取り組んでいる他の団体を知ることができました。そこで、「空き家を活用してセミナーを実施する」というプランをコロナ禍での SDGs ツーリズムとして考えました。近江八幡市内で活動されている方を中心に、様々な取り組みをされている方が混ざることによって活動が発展したり、新しい取り組みが生まれたりすることが期待できます。そして、観光するだけでは感じることができない豊かな自然と人の想いという近江八幡そのものに触れてもらいたいと考えています。コロナ禍においては、オンラインを活用しながら、対面では少人数にするなど継続的に実施することで空き家を拠点とした地域活性につながると考えています。

「人とのつながり」が可能性を広げる

学年も住んでいる地域もバラバラで、少人数のチームでしたが 1 ヶ月間一緒に活動することができて貴重な経験となりました。取材やフィールドワークは「人とのつながり」をキーワードに行いました。「人とのつながり」を大切にすれば、SDGs の可能性、近江八幡の未来はもっと広がるのではないかと感じました。

▲ 木下実験室・安藤あゆみさん

▲ 近江八幡未来づくりミーティング ONLINE での発表の様子

チーム紹介｜TEMPE Girls

取材を通して知ったテンペにちなんでチーム名を名付けました。
少人数ですが、元気いっぱいの女の子チームです。

メンバー
畠 麻理奈（立命館守山高校 3 年生）　長谷美 里奈（群馬県立大間々高校 1 年生）
平田 束（大学生メンター / 立命館大学 1 回生）

No.4 伝統を守る会

近江八幡で繋がる、松明を繋ぐ

近江八幡市内の小学生から高校生を対象とした、「松明で繋がる近江八幡・魅力発見サイクリング」を提案します。安土駅からスタートし、西の湖、葦屋、八幡堀など近江八幡の伝統文化である松明について学びながら地域の魅力を再発見できるコースです。校外学習として取り組むことで、自分が住む地域の良さを再発見できるプランとなっています。

人々の生活に息づく伝統と豊かな自然

近江八幡は織田信長が安土城を築いたことに代表される歴史上の大きなドラマの舞台であったというだけにとどまらず、北ノ庄沢、西の湖付近の水郷とヨシ文化や雄大な近江盆地を一望できるのどかな田園風景など人々の生活の中に息づく伝統と豊かな自然の融合が唯一無二の魅力を引き出している街です。また腐敗臭のする八幡堀を市民の手で美しい観光名所に復活させたように近江八幡を愛し、活気づけようとする熱い人たちがたくさんいるのもこの街の魅力です。これらの魅力を多くの方々に感じていただく為に旧市街のみならず、街全体に観光の和を広げることが課題であると感じました。また、自然あふれ歴史のある近江八幡市の魅力に、気づいていない方々も多いため、多くの方に魅力を再確認していただくことも課題であると考えました。

コロナ禍でも楽しめるサイクリングツアー

私たちは、コロナ禍でも旅を楽しめるサイクリングツアーを提案します。このツアーは、松明の一生をめぐる旅となっており、松明の壮大さや、伝統が生み出した美しさを体感することができます。松明には、「結」という精神があり、これは「松明を結う」という意味と「人と人とのつながりを築く」という２つの意味が込められています。私たちの考えたツアーでは、松明の伝統を受け継ぐとともに観光客と地域の人とのつながりも深めていけるようなツアーの実現を目標としています。

松明結の精神（たいまつゆい）

松明をつくる「結」

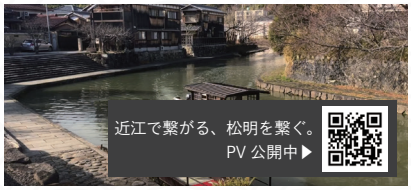
糸を束ね１つに
まとめる、結びつける

みんなで助け合う「結」

松明づくりを通して人々が
助け合えるつながりを築く

▲ 西の湖からの景色

▲ ヨシを保管する倉庫



▲ 八幡堀

松明の一生を巡る旅

このSDGsツーリズムは、松明の一生をめぐる旅となっています。安土駅でレンタサイクルを借りヨシの草原の周りを走ったあと、松明が実際に結われているところを見学、体験したりお話を聞いたりして松明について学びます。その後、神社やラコリーナなどに行って松明フェスなどのイベントに参加することで地元の人と関わる機会もあります。このツアーの中で、「近江八幡の火祭り」と言うアプリを利用することで、市内のお店のクーポンを利用したり、松明の図鑑などを見ながら観光することもできます。この旅を通して、近江八幡の自然や職人さんの手習いの技術によって一本の細いヨシから、大迫力の松明ができることを是非五感で感じていただきたいと思います。今まで気が付いていなかった近江八幡の自然や、祭りなどの魅力を再発見でき、私たちの無意識のうちに馴染んでしまった伝統文化を客観的に見直すことができます。是非、地域の魅力を再発見し、自分を見つめ直すことができる最高のリフレッシュを近江八幡市で自転車とともに体験しませんか？

松明で繋がる近江八幡魅力発見サイクリングコース

10:00
安土駅

びわ湖よし笛ロードで
風景を楽しむ

松明ワークショップに参加し
松明について学ぶ

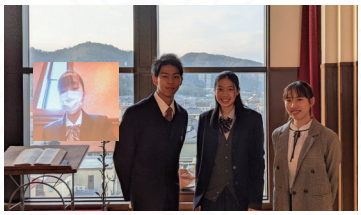
八幡山から
びわ湖を見渡す

16:00
安土駅

伝統を未来へ繋ぐ

今回の活動に参加したことによって、県外の高校の SDGs 活動を知ることができ、色々な人の見方（視点）や意見を知ることができました。最初は、自分の身近にある伝統や行事など思い浮かびませんでしたが、この活動を通して自分の身近にあるものや伝統などを調べてみたいと思うようになりました。今後は、伝統を未来へ繋げられるように工夫し、若者にも受け入れられるようにしたいと考えています。

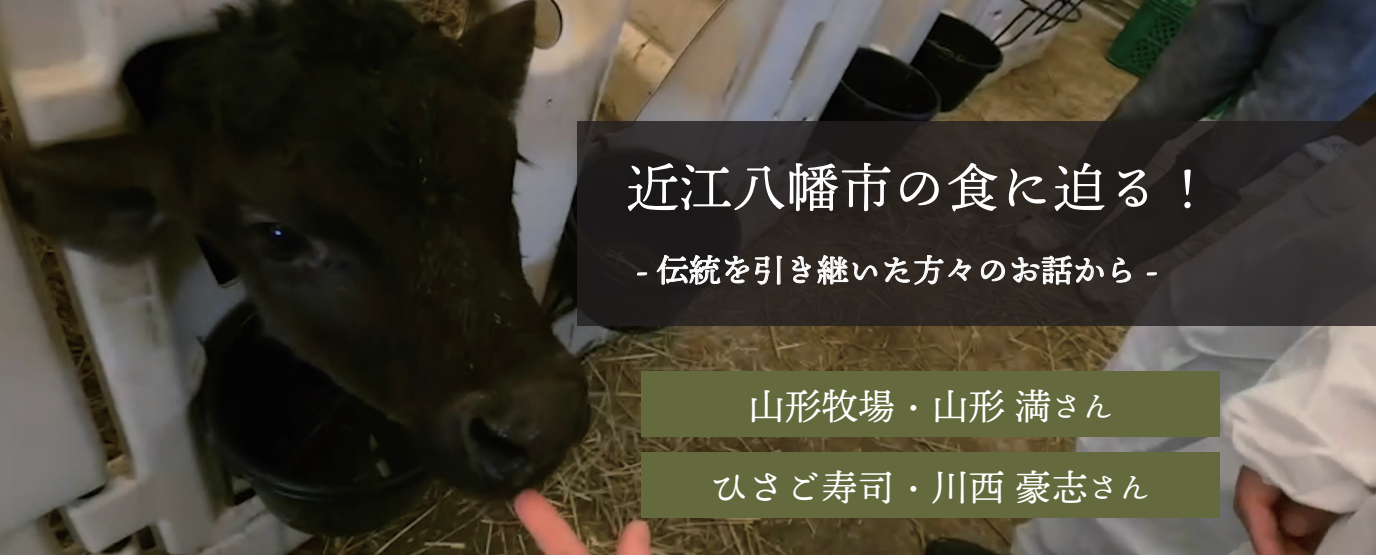
チーム紹介｜伝統を守る会



滋賀県の高校生２名と群馬県の高校生とメンターで身近にあるものを大事にし、古き伝統を未来へ繋げようと考えるチーム。

メンバー

山本 優寿（滋賀県立守山高校１年生）　曽根 憂奈（群馬県立大間々高校２年生）
後藤 耀寛（近江兄弟社高校１年生）　戸簾 紗弥香（大学生メンター / 龍谷大学２回生）



近江八幡市の食に迫る！

- 伝統を引き継いた方々のお話から -

山形牧場・山形 満さん

ひさご寿司・川西 豪志さん

「残したくない、また食べたい」お肉を作る

近江牛とは、約 400 年という日本で最も長い歴史をもつブランド和牛で、その味は「伝統食」として今日に至るまで多くの人々を楽しませている。そんな近江牛を 31 年間育てているのが山形牧場の山形満さんだ。

山形さんは、もともと牛を育てていた父の牧場を継ぎ、平成 4 年から繁殖肥育一貫経営を始めるが、最初の約 4 年はお金にならなかった。同じ取り組みをする人がやめていく中、山形さんは「絶対成功する」と信じ懸命に取り組みを継続した。

山形さんがそこまでして繁殖肥育一貫経営にこだわる理由。それは「残された肉を見ると悲しくなるから」だという。だからこそ山形さんは、「残したくない、また食べたい」と思ってもらえるような美味しいお肉を、1 から作っているのだ。「こうして一度牛を見てしまうと、残そうなんて絶対に思えないはずだ」と語る山形さん。伝統食を守るために私たちが出来ることは何でしょうか。

消えつつある郷土料理を残す

次にお話を聞いたのは、ひさご寿しの料理長、川西豪志さん。彼いわく、この世には「出回っていない郷土料理」が沢山ある」という。漁師や、山奥にいる人だけが知るという狭いコミュニティ間で食べられる料理は、人に知られることなく、地域特有の食文化でさえ消えてしまうことがあるそうだ。川西さんは、そういった消えつつある料理を発掘し、調味料を加えるなどお店の料理として提供している。

川西さんは、「食べた、感じたという経験が大事」と話す。「そこに行かなければ、出会いがなければ食べられない。」という値段だけではない新たな”物差し”で料理を見ていかなければならない。

またひさご寿しの入口のドアは江戸時代に琵琶湖で物資を運ぶことに使われていた、水に強いまるこ舟の底板使用されていた。さらに、舟の浮きがシャンデリアとしても使用されていた。これらの家具からは趣が感じられるだけでなく、モノに対する責任が感じられた。

▲ 漁師の料理「じょき」

▲ 浮きのシャンデリア

取材先｜山形牧場
子牛の飼育から肉の販売までを一貫した繁殖肥育一貫経営を行っている。

取材先｜ひさご寿し
滋賀、びわ湖の食材を使った伝統食を提供している。

取材者

立命館守山高校	3 年生	篠原 巧
群馬県立大間々高校	2 年生	鈴木 夢叶
近江兄弟社高校	1 年生	岡田 莉奈
龍谷大学	2 回生	井保 七香

みんなが同じ食卓を囲める社会を目指して

- 食べるは人を幸せにする -

木下実験室・安藤 あゆみさん

木下実験室、近江八幡、そして地域創生。

滋賀県近江八幡市。木下実験室の工房はひっそりと存在感を放っていた。この実験室をかまえているのが安藤あゆみ氏だ。彼女は実家が地方創生に関わる仕事をしていたことから、地元に貢献したい思いで多くのプロジェクトを行なってきた。2010 年からの 7 年は安土のショップマドレに参加、2012 年には満月キャンドルナイトを行うなど、その活動の幅とクリエイティブさは計り知れない。

手に届くものを提供するなかで、特に力を入れているテンペは、大豆を発酵させたものだ。彼女自身、過去にはテンペを好まず関心もなかったという。そこからオーストラリアへ渡った際、口にしたテンペがかつての印象を覆した。こういった自己体験から、「食材の価値観の変化を共有したい」と帰国後に自分の住む町でテンペの販売をはじめた。

笑顔が素敵な亭主

彼女は渡米での経験からマクロビの考え方の虜になり、ヴィーガンとなった。その後、テンペと奇跡の出会いをしたオーストラリアに滞在していたころの写真を快く見せてくれた。とりとめのない一瞬のマーケットでの 1 枚も、彼女の大切な財産だろう。

明るく朗らかな彼女だが、取材していくうち、今確立されている彼女のスタイルも、多くの試行錯誤があったように感じた。オーストラリアでは、自分から住み込みの農家ボランティアに参加し、自分がいることで相手の役に立つ喜びを学んだという。

「自給自足で生まれる幸せはお金には変えられない」そう話す彼女の周りには多くの工夫がなされていた。野草を採取し、食べることで足元に目を向けて新たな世界を見出す。居間の壁は自ら材料を調合して塗る。普段考えることのない部分に着目する彼女が「周りに恵まれている」という言葉は納得できた。

価値観を変えるテンペ

▲ 発酵しているテンペ

大豆を発酵させたテンペを作るには、約一週間の時間を要する。月曜日に大豆を砕き、火曜日に水に浸す。水曜日に茹でて発酵。テンペは温度の変化に敏感であるため、29－30 度に保つ工夫をする。実際に取材期は冬だったが毛布がかけてあった。そんな繊細なテンペを作るための大豆には、滋賀県の在来種の大豆で希少な「みずくぐり」を使用。脂質が多く、大粒で甘味の強いものだ。出来上がりを見せてもらうと、断面は大豆の形がはっきりわかり白色だった。

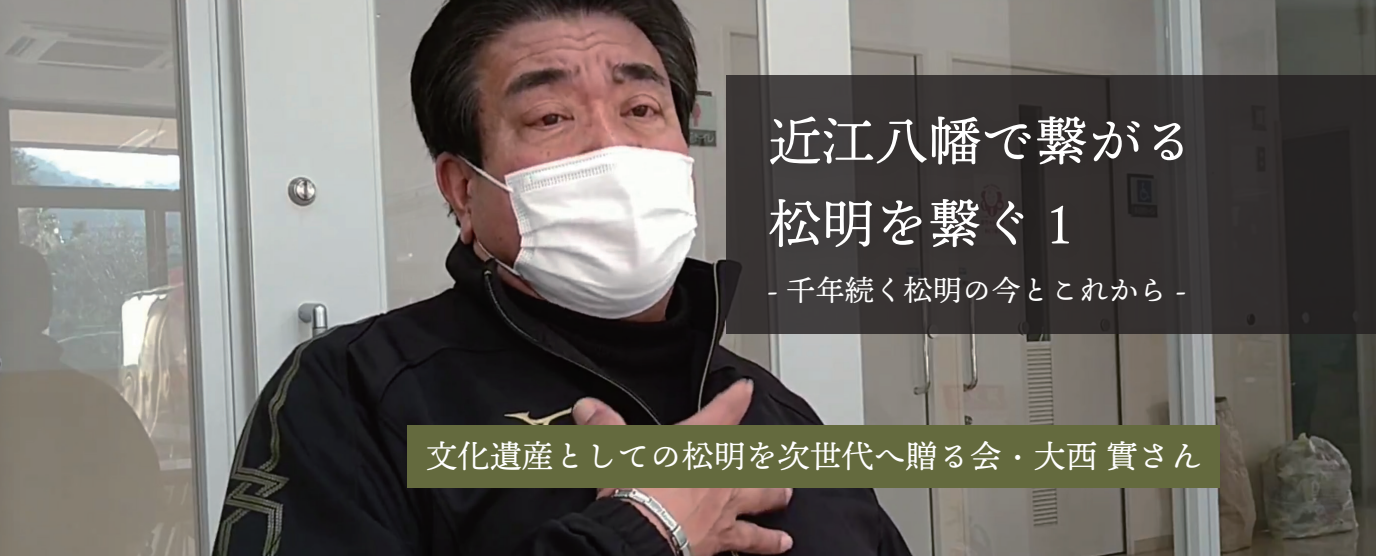
購入者は飲食店関係者をはじめ、食に興味がある人が多いという。我が子のようにテンペを愛する彼女の手にかかれば木下実験室のテンペに勝るものはないだろう。

取材先｜木下実験室

自家製フレッシュテンペ、地元オーガニック野菜で『無国籍ヴィーガン料理』と掲げ、テンペの販売をマルシェでの出店を中心にオーダー受付・配送を日本全国に向けて行っている。

取材者

群馬県立大間々高校　1 年生 長谷美 里奈
立命館守山高校　3 年生 畠 麻理奈
立命館大学　1 回生 平田 束



近江八幡で繋がる 松明を繋ぐ 1

- 千年続く松明の今とこれから -

文化遺産としての松明を次世代へ贈る会・大西 實さん

大西会長と松明フェス

近江八幡で有名な火祭りである松明フェス。その松明フェスを主催している遺産を次世代に贈る会の会長の大西實さんにインタビューをした。

2020 年の松明フェスの取り組みについては、近江八幡の特徴である 4 つの松明を長期間設置し、12 月にしめ縄作り教室を開催した。長期間設置という例年と違う見る形に留め発信。しめ縄作りには、大勢の人が参加した。松明フェスの中止での悪影響については、祭り好きな人などに憧れて祭りを継承していくがそれが出来ないことだと言う。今年の松明フェス開催について大西会長は「今年も松明フェスはやらない。出来ないのは残念だが、伝承的な松明が途切れないことを祈る。コロナが終息したらみんなでまた作りたい」と熱く語った。

松明の起源

古くは子どもの健やかな成長を願い、我が子の背丈に合わせて年々大きく作ったり、反対に「この松明のように大きくなってほしい」と我が子が幼いほど大きくつくり、だんだん小さくしたりする文化もある。また、松明の形は袴姿の人間を表していると言われている。(諸説あり)

各集落で独自の松明を制作し民氏神の神事において奉火する風習がある。それを先人たちに守り継がれてきた。

▲ 左義長まつりの様子

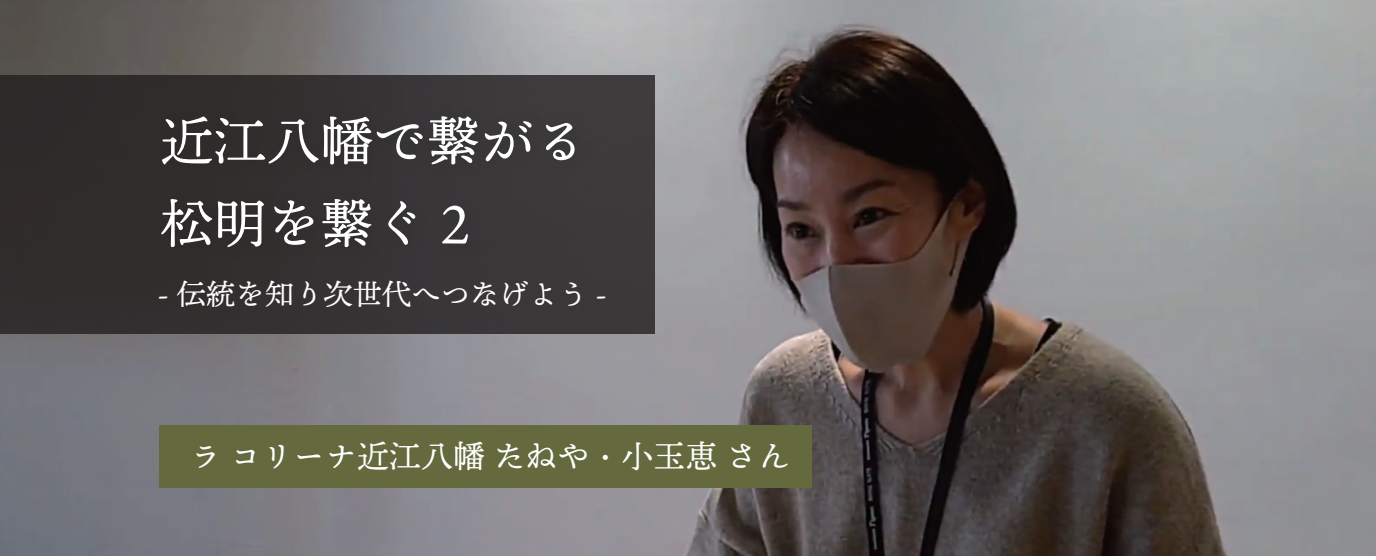
近江八幡にとっての松明の存在

松明フェスという形で多くの市民は、祭りと言えば松明と言うほど、深く関わってきた。その関わりを繋げていくためにも、大西会長は「若者や子供にも祭りを通じて松明の雄大さ・素晴らしさを知って欲しい。時代が変わっても、日本人の祭りに対する心は残すべき。」と語っていた。

近年、どこの県も都市化が進んできている。だが、近江八幡の農村部は、伝統を大切にし残っていた、その地元愛から松明は、何千年も前から今も大切に残されているのだろう。

取材先｜遺産として松明を次世代へ贈る会

伝統的な松明結の技術伝承と研鑽のための、人材を育成しており、地域全体で、松明資材（ヨシ、菜種殻等）の安定供給の確保に努める。松明の魅力・結のこだわり等に関する情報発信を行う。



近江八幡で繋がる 松明を繋ぐ 2

- 伝統を知り次世代へつなげよう -

ラ コリーナ近江八幡 たねや・小玉恵 さん

新しい知恵を取り入れて伝統をつなげる

例年、施設内の田んぼで松明フェスを行っているラ コリーナ。松明は、いろんな部門の人や地域の人に関わってもらうことで未来を繋ぐ 1 つのツールだそうだ。それぞれの地域の中だけでやっていて独自の松明を制作して守ってきた、それ故に次世代へ伝統を繋げることか難しかった。だが、地域の学生など多くの人へ松明の作り方を伝えることを経て伝統の伝え方を考える機会となった。学生が携わることでラ コリーナを会場に展示するだけでは得られない反応があり、見た目だけでなくどうやって生まれたかに興味を持つ人が増えた。

コロナ禍における社会と松明伝承のあり方

コロナを経て、これからの松明文化発展へどのように関わっていくかという問いに対し、小玉さんは「これからも祭りはできずとも祭り文化の普及に努めたい。1 人ではできない、地域の方々の協力があるからこそ出来る。そのためにたねや・社会部があり、地域社会から必要とされる会社にする活動、伝統継承や景観保全などをしている。」と語っていた。

▲ 松明フェスの様子

地域の方の声

地域の方と松明のつながりが深いと言うことで、松明と深く関わりをもっているヨシを使った葦簾 (よしず) というヨシの茎で編んだすだれを出荷している方にもお話を聞いた。最もヨシを使用している茅葺き屋根 (かやぶきやね) は、60cm 程の厚さに重ねヨシの空洞を利用して保温性に優れている。

現在は、建築基準法により新たに茅葺き屋根の家を建造することが規制され ている。需要が減ったことで余ってしまったり、刈り取られなかったヨシは焼き畑農法として使われている。松明という伝統文化を支える原料のヨシの保全の重要性にも気付かされたインタビューとなった。

取材先 | ラ コリーナ近江八幡・株式会社 たねや

和洋菓子のメインショップを始めとし、自社農園や本社などがある複合商業施設。自然を愛し、自然に学び、人々が集う繋がりの場として、近江八幡市内外から多くの人々が訪れる人気観光スポットでもある。

取材者

近江兄弟社高校	1 年生 後藤 耀寛
滋賀県立守山高校	1 年生 山本 優寿
群馬県立大間々高校	2 年生 曽根 憂奈
龍谷大学	2 回生 戸簾 紗弥香

伝えたい思いがここにある

- 牛への愛情・革小物にのせる思い -

橋場牧場・橋場 芳明さん

Cogocoro・田中 秀樹さん

近江八幡で見つけた「思い」

私たちが取材をしたのは、滋賀県近江八幡市安土町大中にある橋場牧場、そして同市多賀町あきんどの里内の Cogocoro だ。

橋場牧場では家族で 250 頭の牛を飼育している。牛に対する深い愛情や、消費者を思う気持ちについてお話を聞くことができた。Cogocoro ではレザークラフト体験や革製品の制作・販売を行っている。革製品に携わるようになったきっかけや、革製品に乗せる思いについてお話を聞くことができた。

全く違うお仕事をされているお二方が共通していたことは、どちらの取材でも普段の生活では感じることができない、実際に話を聞いたからこそ知れる、熱い思いや仕事への誇りを感じれたことだ。

ここでは、近江八幡で見つけた様々な「思い」を伝えられたらと思う。

牛に愛情を

近江牛を育てている橋場牧場の橋場さんにお話を聞いてきた。そこで語ってくださったのは、牛にかける情熱だった。橋場牧場では牛の食べる藁は、近隣の米農家さんの藁を使い、逆に牛糞などは発酵をさせて肥料として米農家さんに使ってもらうなどして牛が地産地消している。

また、生きるうえで大切な水にもこだわっていて、牛に合わせて浄水器を設置するなどまさに牛に愛情を持って育てていると言える。そのことはその牛を食べる私たちの健康、安全にも繋がっている。

橋場さんのお話を聞き、地産地消など私たちが出来ることは何か考えていくべきであると感じた。

思いを伝える革小物

Cogocoro では、「思いを伝える革小物」をコンセプトに皮を使った製品を作っておられる。自分の写真やメッセージなどを使って世界にひとつだけのレザークラフトを作ることができ、自分の想いを届けたり、残したりするため多くの人に楽しまれている。

また、出荷した近江牛の革を再活用し革製品製造も行っており、生命を無駄にせずに最大限活用するのは、SDGs に取り組む姿勢も込められている。

店主の田中さんにお話から、革小物を通して、人々の想いをつなぎたいという強い信念を感じた。

▲ レザークラフトのサンプル

取材先｜橋場牧場

近江八幡市の安土町にある近江牛を育てている牧場。

取材先｜Cogocoro

近江八幡市の仲屋町にある帆布鞄と革小物のお店。

取材者

八幡商業高校	3 年生	三浦 彩伽
群馬県立大間々高校	2 年生	坂井 楓歌
滋賀県立守山高校	1 年生	石田 有咲
立命館大学	2 回生	豊田 真彩

プログラム分析

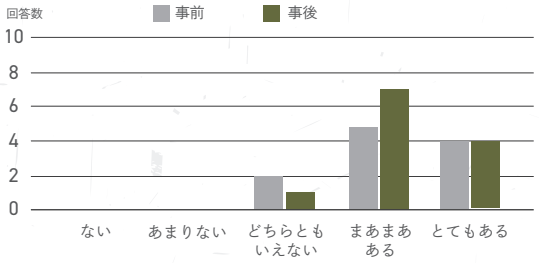
SDGs スキル調査結果

「近江八幡未来づくりキャンパス 2020」では、チーム活動でのフィールドワーク・取材・記事作成活動で得た様々なスキルを活かして、発信活動や、参加学生自身の活動に活かせることを期待しています。

プログラムで得られるスキルを検証するために「SDGs スキル調査」を実施しました。活動に必要と考えられるスキルやマインドに関する 12 項目を 4 段階で自己評価してもらい、その評価理由を記述する調査を《事前》《事後》で行いました。ここでは、12 項目の中から事後調査で特に身についたと回答が多かったスキルについて抜粋してプログラムでの成長を示します。

持続可能な開発マインド

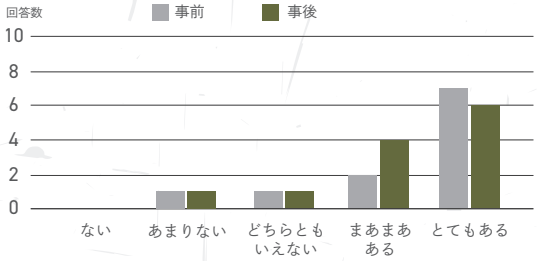
グローバルに考え、社会の変化にはローカルに適応・行動することができる



身につけたいスキル（事前）・身についたと思うスキル（事後）でどちらも 1 番回答が多かったスキルです。現場でのフィールドワークや取材活動から、SDGs の視点でツーリズムを考えたことからこのスキルが成長できたと考えられます。

越境力

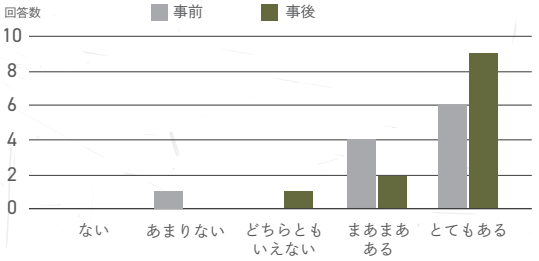
SDGsを通して組織を超えて繋がり、様々なステークホルダーを巻き込むことができる



身についたと思うスキルで多く回答があったスキルの 1 つです。事前と事後の結果を比べるとあまり変化は見られませんが、学校や学年の違う生徒とのチーム活動や、取材やフィールドワークでの様々な地域の方との出会いから身についたと感じていると考えられます。

包摂力

異なる価値観や歴史・文化に対して謙虚な心や思いやりを持ち、許容することができる

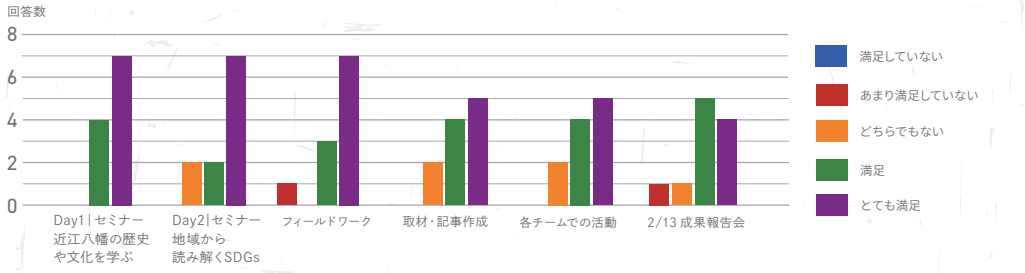


今回のプログラムでは、近江八幡の歴史や文化について学ぶ機会が多くありました。プログラムでの気付きや学びをチームメンバーで共有しながらプランを作成したことからこのスキルの成長が大きかったと考えられます。

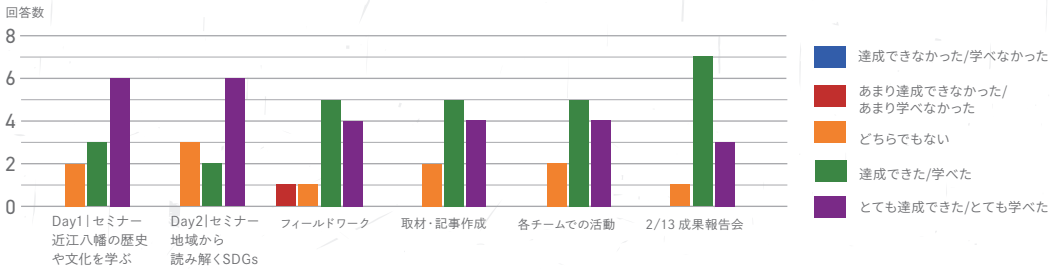
レクチャー・活動の満足度調査

2 回のセミナー、フィールドワーク、取材・記事作成、各チームでの活動、2 月 13 日の成果報告会、それぞれのフェーズでの《満足度》《達成度・習熟度》についてアンケートを行いました。

満足度



達成度・習熟度



上記の結果より、プログラム全体として満足度が高いことが分かりました。学校も学年も違うメンバーとの活動でしたが、柔軟にオンライン・オフラインを活用したことで高い満足度を得られるプログラムとなりました。セミナーの満足度・習熟度に比べ、取材・記事作成やフィールドワークの満足度・習熟度が低かったのは、フィールドワークにはチーム全員が活動に参加できなかったことや、活動が短期間であったことが要因として挙げられます。

プログラム受講生の声

- ツーリズム、コロナ禍、SDGs という全く異なる三本の柱を掛け合わせて作るのがとても難しかったがいい経験になった。
- SDGs についてより深く知ることができた。自分達の身近にも SDGs が隠れていることが分かり登下校している時まわりに SDGs がないか気にしながら歩くようになった。
- 今回、地域の観光を促進するための視点を知れた。私たちの地域も近江八幡と同様に地域の格差があるので、学んだことを自分の地域にも生かし、地域を活性化させたい。
- この 1 ヶ月で感じ、学んだことはとても良い経験だった。そして、近江八幡の事が前よりも好きになった。だから、自分の住む地域の魅力も探してみたい。
- 近江八幡市長へ発表したり、一緒に意見交換できたりしたのはとても貴重な経験となった。

Message

プログラム主催である近江八幡市長より
メッセージをいただきました。

近江八幡未来づくりキャンパス 2020 は、高校生が地域の未来について学び、「じぶんごと」として実践できる力を養うためのプログラムです。コロナ禍の影響から、一時は開催見送りも検討せざるを得ない状況にもありましたが、オンラインを中心としたプログラムとすることで、近江八幡市内や滋賀県内のみならず、県外からも熱意ある高校生が参加してくれました。

参加してくれた高校生達はコロナ禍での制約を受けながらも、近江八幡の地域に飛び出し、フィールドワークや取材を通じて、地域の課題や魅力を探り、未来のアイデアを提示してくれました。近江八幡のまちに入り込み、真剣な想いをもって取り組んでもらったことを何よりも嬉しく思います。

本プログラムでは、「若者」「稼ぐ」「実現性」の 3 つの視点をポイントに取り組んでもらいました。高校生の視点でとらえた地域の課題や魅力、発見した近江八幡市に散らばる「SDGs のタネ」に、いかに稼ぐための仕組みを取り入れ、持続可能な取組として実現させていくかが大切です。プログラムは修了しましたが、これからも引き続き取組みが継続されることを願っています。

最後に、本プログラムの実施にあたり、ご協力いただいた学校関係者の皆さま、取材に対応してくださった地域の皆さま、高校生達に寄り添い活動をサポートしてくれた大学生の皆さまに心から感謝申し上げます。

近江八幡市長
小西 理

近江八幡未来づくりキャンパス 2020
コロナ禍での SDGs ツーリズム

2021 年 3 月　発行

発 行 者　近江八幡市
編 集 者　一般社団法人 SDGs Impact Laboratory
HP：https://impactlab.jp
編集：中西 優奈

© Copyright 2020 SDGs Impact Laboratory

本誌に掲載されている記事の無断転載を禁じます。すべての著作権は記事執筆者
またはその情報提供者に属します。本誌の無断複写・複製は著作権法上の例外を除き禁止です。

探そう、近江八幡の魅力。
創ろう、近江八幡の未来。